

報告書名：口腔機能が脳に与える影響と口腔機能を守るための最適な条件

研究者名：富田美穂子<sup>1)</sup>、中村浩二<sup>2)</sup>

所 属：<sup>1)</sup>松本歯科大学口腔生理学教室、<sup>2)</sup>岐阜医療技術短期大学衛生技術学科

口腔と全身の関係が取り上げられるようになり、正常な口腔組織の維持は全身の健康促進に深い関係がある事が多方面より証明されてきた。今回我々は、前頭葉機能の測定に広く使用されているかなひろいテストや短期記憶力を判定するための記憶力診断テストを用いて、正常な口腔組織の重要性や口腔機能の一つである咀嚼運動が脳神経細胞に与える影響を調べた。また一方では日本国民の歯科医療に対する意識を調べるためにアンケート調査を施行した。かなひろいテストはかな書きのおとぎ話を読みながら文中に出てくる「あ、い、う、え、お」の5文字に丸をつけていくテストで、咬合のバランスが崩れている患者29名を対象に補綴処置前・後の2回行いその得点を比較した。記憶力診断テストとは記憶するための写真(32枚)と想起するための写真(32枚)で構成されている課題を遂行するもので、今回は2つのテスト形式(1・2)に従って2種類の課題(A・B)を用い、62人の健康成人に対して行った。テスト形式1では咀嚼運動(煎餅を咬む)の前・後の2回で得点を比較し、テスト形式2では咀嚼運動直後と20分後の2回の得点を比較した。無作為に選んだ910名に対して全歯牙28本の価値、1本の治療にかけられる金額、治療時高いと思われる金額、定期的な歯科受診の有無、のアンケート調査を行った。その結果 補綴処置前の平均点±SDは24.2±11.8、補綴処置後は28.1±13.2であり補綴処置後の方が有意に高得点を示した( $p < 0.0001$ )。テスト形式1で施行された被験者31名の課題A(咀嚼運動前)の平均点±SDは75.3±10.1、課題B(咀嚼運動後)の平均点±SDは81.2±9.0でありこの平均点間に有意差が認められた( $p < 0.05$ )。テスト形式2で施行された31名の課題A(咀嚼直後)の平均点±SDは82.5±8.8、課題B(咀嚼20分後)の平均点±SDは83.4±5.2であり、この形式では両課題の平均点間に有意差は認められなかった。全歯牙28本の価値は973万円、1本にかける治療費は24,300円、高いと思われる治療費は7,600円、定期的に歯科医院を受診しているのは11.2%だった。以上の結果から、補綴処置により咬合を回復することで前頭葉の機能(意欲や集中力)の向上がみられ、咀嚼運動は20分以上の短期記憶力の向上を促した。しかし、現在の平均歯科治療金額(2,000円程度)の請求は患者に受け入れられる範囲内であるにもかかわらず、歯科医院に定期的に通院している人の割合が全体の11.2%という事は、日本において歯科に対する予防の意識レベルが低いと考えられる。

本研究は、口腔機能が脳に与える影響を調べることで口腔の重要性を客観的に評価し、毎日の生活の中でどのような環境・心構えが必要かを検討した。すなわち口腔内の疾患予防・早期治療を推進する事で高次精神活動の活発化を惹起させ、『良い歯で楽しい食事』をすることで意欲向上等の精神的な面への補強を確立したい。